

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：梁蘊嫻

論文題目：江戸文学における『三国志演義』の受容 — 「義」概念及び挿絵の世界を中心に —

梁蘊嫻の博士学位請求論文、「江戸文学における『三国志演義』の受容 — 「義」概念及び挿絵の世界を中心に —」は、中国明代の長編小説『三国志演義』が近世期日本においてどのように受容されたかという重要なテーマを取り上げ、その前半では文字テキストの翻訳および文学・演劇作成における再解釈、後半では挿絵における内容および構図上の変動を精緻に追い、日本における中国古典小説のありかたをジャンルを超え、通時的に問い直そうという精力的な学術研究である。研究手法の独自性に加え、徹底した実証的な調査研究が功を奏して、先行研究に多くの修正を迫ると同時に、近世日本における中国文化受容そのものの諸前提を再検討する必要性を浮かび上がらせている。

『三国志演義』の原本は17世紀初頭までに中国から日本へ伝来し、早くから複数の版本として漢学者の間で読まれていたが、日本語訳『通俗三国志』（1689～1692）の刊行が大きなきっかけとなり、18世紀初頭には一般民衆にまで浸透した。日本における受容研究は、中世軍記物語に対する影響をはじめ、『通俗三国志』成立論、あるいは草双紙・洒落本といった俗文芸諸ジャンルの作品研究、挿絵に関しては作品別・人物別の先行実績が知られる。しかしジャンルを超えるかたちで17世紀から幕末にいたる総合的な理解を目指した比較文学・比較文化研究は皆無であった。本論文は、従来の文学と美術史研究ではジャンルと時代区分によって隔離されがちな問題軸を、複数領域を通して関連させ、その過程で日中文学の新たな理解の土俵を整えたと言える。『三国志演義』の受容過程を総合的に描くことによって、東アジアの一言語圏における『三国志演義』の影響を明瞭に示すのみならず、各時代、それぞれの社会層で繰りかえし翻案・再解釈された『三国志演義』が、痕跡として近世日本文学全体の特質をどう浮かび上がらせたかに論点を見いだしたことも、称賛に値する。

本論文の総合性に加えて、筆者が多数の未翻刻資料を渉猟し、それぞれを独自に翻字・校訂して、また挿絵に関しては国内外の漢籍原本調査と分析を広く行ったことは高い評価に値する。その作業を経て、先達の解明し得なかった新たな知見を数多く明示することに成功しており、今後の前近代日中比較文学・比較文化研究および美術史に資するところ大であることは間違いない。

本論文は本文編と図版編の2分冊から成る。本文編は2部構成（「「義」概念の受容をめぐる研究」と「挿絵の研究」）で全8章、前後に序章および終章が加わる。図版編は第2部に対する挿絵集（「中国刊本の挿絵に見られる『三国志演義』の世界」「『絵本三国志演義』の挿絵」「『三国志画伝』—地理への関心—」「『世話字綴三国志』における歌舞伎役者の似顔絵についての考察」）に続いて、漢籍絵入り本の一覧と『三国志演義』諸本と『絵本三国志』との影響関係一覧表が附録として掲載されている。以下、本論文の構成

に即して議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序章において、まず『三国志演義』の成立を概説した上で、近世期日本における伝来と初期受容を紹介し、日本語訳『通俗三国志』の刊行と流布を契機とした文学利用を俯瞰する。後半では、先行研究を整理しながら、本論の問題提起を行う。すなわち原本の言語テクストにおいて「義を演ずる」ことが主題であったのに対して、日本語訳では「義」を「情（なさけ）」に置き換えることによって、中世軍記物語以来戦を語る際に強調された武士の倫理観と近世社会における儒学的生活倫理に近づけ、原本とは異質の意味体系を創出していること。また挿絵を描くにあたって、『絵本三国志』（1788）の画工が数種の中国刊本から取捨選択することによって、そのどれにも見出せない画題（描かれる内容）と構図を創り出し、当時の日本の読者の嗜好に合う、躍動あふれる合戦と家族の恩愛描写を意図的に加味したという仮説である。なお審査委員からは、先行研究の利用について、いっそう批判的な態度で臨むべきでは、という意見とともに、『三国志演義』の現代語訳および訓読に誤りが見られるとの指摘があった。

第一部では『三国志演義』の「義」概念を取り上げる。原本における「義」と「気」の関連に始まり、「公的正義」としての「大義」と「私的正義」としての「義気」を対比させるかたちで、中国小説における「義」の位置づけを試みた（第一章）。その上で、『通俗三国志』において「義」がどのように訳されたかを検証し、その結果「大義」が希薄化すると同時に、柔軟な「私的道德」として認知された「義気」が制度化された「公的道德」に歩み寄る過程を提示する。審査委員からは、近世における「義」および「忠義」概念は、時代と社会的文脈において揺れが見られ、思想史文献にもう少し視野を広げてほしいという要望があった。第一部の後半（第3・4章）では、『通俗三国志』の影響下に成立した浄瑠璃『諸葛孔明鼎軍談』における親子恩愛劇と、絵入り三国志物における「義」概念の受容を検討し、一般民衆の受容を横断的かつ鮮明に立証することに成功している。

第二部では中国刊本の挿絵を能うかぎり精査することによって、各種『三国志演義』刊本挿絵の特質を分析し、その観点から『絵本三国志』で参照されたであろう挿絵を特定する。日本・アジア・欧米に散在する原本を調査し、手堅い分析によって『絵本三国志』挿絵の成立とその位置づけを見事に論じており、この第二部こそ本論文最高の達成であることは審査委員全員の一致した意見であった。日本の版本に適合するように複数視点、俯瞰的視点、人物描写の重視、女性図の多用など、原典模倣から生みだされた多様な工夫を指摘することによって、本論のテーマである『三国志演義』の受容を超え、近世絵入り本そのものを性格づけるのに多大な功績を成し遂げたことは間違いない。なお審査委員から、図版編では丁付が欠けており、またキャプションに不統一が見られるとの指摘があった。

以上、不用意な誤記・誤訳に加えて、思想史の領域に対していっそう視野を広げるべきなどとの指摘もあったが、それらは瑕瑾に過ぎず、本論文の学問的寄与を大きく損ねるものではないことが確認された。

以上の審査の後、審査員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、梁蘊嫻の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。